

皆の意識で守られる

福井大学教育学部附属義務教育学校 8年 坪川 心優

「三日分で。」私が風邪をひき、病院で医師から薬の処方日数を聞かれた際の母の答えだ。「えっ三日分でいいの？」医師が少し驚いた。何故三日分にしたのか私も気になり、病院を出てから、母に尋ねた。咳がひどくなってきたから診てもらったが、感染症ではない風邪なら、いつも薬を飲めば、三日以内に落ち着く。一週間分貰っても、治ったら飲まないし、余った分は捨てることになるから勿体ないとのことだった。また、「解熱剤どうしましょう」という問いにも、「前回頂いた本人の薬が残っているので大丈夫です。」と断っていた。そんなに処方薬を減らして、意味はあるのだろうか、疑問に思った。そんなある日、テレビから「飲み残した薬は薬局へ」と聞こえてきた。私は、それがとても気になり、詳しく調べてみることにした。

すると、毎年かなりの額の残薬が廃棄されていること、また、残薬を薬局へ持っていくと、処方日数調整ができる可能性があることが分かった。これら医療費の一部は、税金で賄われている。ということは、知らず知らずに税金を無駄にしているかもしれないと、驚愕し、母の行動は、意味のある大事なことだと気付かされた。

さらに調べていると、救急車も深刻な問題にあることが分かった。日本では、原則的に誰でも救急車を無料で利用できる。当たり前を感じているこうした救急体制が整備されていることは、世界的に見ると稀なのだ。そして、この制度も納税によって支えられている。しかし、救急出動件数は、年々増加しており、令和五年は、七六三万以上と過去最高だった。要因は、高齢者の傷病者の増加・熱中症傷病者の増加だ。高齢化が進み、地球温暖化が地球沸騰化と言われる昨今、これらの救急搬送は、今後も増えることが考えられるが、必要としている人に、税を通して救助の手が届けられる制度には、国民の一人として誇りにすら感じられる。しかし、問題は「緊急性の低い傷病者の増加」があることだ。傷病搬送内訳で見ると、なんと四八%が軽症だったのだ。私の祖母が倒れ、救急車がすぐ来てくれた時の頼もしさ、安心感は、今でもはっきり覚えている。こうした救急体制が整備され、誰もが平等に医療を受けられる制度は、納税によって支えられている。納税以上の恩恵だ。しかし今後、これらに係る費用は増加していき「すぐに来てくれる」救急車は難しくなってしまうかもしれない。これは、重大な問題だ。

「三日分で。」母の行動は、日本全体で見たら、とても小さなことだ。しかし、国民全員が税に関心を持ち、大切に使う意識を持てば、大きな節税になり、この医療制度を、未来の日本を守っていけるのではないかと思う。

私の夢は、医者になることだ。将来、目の前の患者を救うだけでなく、納税という形で見えない患者も救える大人になろうと思う。